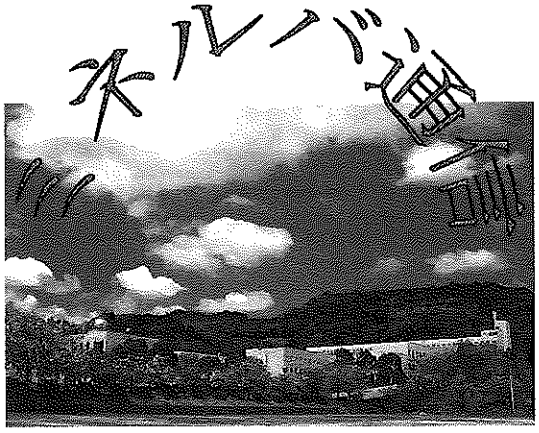
所報 No.12

佐賀県教育センター
平成11年3月19日



もくじ

◆特集　子どもの生きる力をはぐくむ教育Ⅱ …… 2～3
・小学校における「総合的な学習の時間」の授業づくり
◆指導と評価シリーズ …… 4～7
・小学校算数『つくる　楽しむ図形の学習』
・中学校道徳『子どもが意欲的に取り組む道徳授業』
◆受講者の声（研修講座から） …… 8
◆初任者研修 …… 9
◆佐賀再発見シリーズ「謎の多い肥前鳥居」 …… 10
◆校内研究　～我が校の取組～ …… 11
・浜玉町立平原小学校
・唐津市立第四中学校
◆お知らせ …… 12

《巻頭言》

21世紀を担う子どもたちと情報教育

研修三課長　乗田　貞麒

昭和45年頃に工業高校電気科で、コンピュータの動作原理等の知識を理解させる教育が行われた。また、昭和50年代後半から工業・商業高校でコンピュータのプログラミング言語の教育が始まった。昭和60年代初めはコンピュータが小・中学校及び高等学校の各学校に導入され始め、学校教育で活用されるようになった。学校におけるコンピュータの利用は、「コンピュータ等に関する教育」、その後「コンピュータ等を利用した学習指導」へと進んだ。

現在、高度情報化社会の到来に伴い、インターネットや電子メール等の情報通信ネットワークの利用が盛んになってきた。コンピュータは、「学びを支援」する道具としてますます発展している。

文部省の情報教育推進協力者会議は、その答申の中で情報教育を「情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報化社会に参画する態度を育成することを目標とした教育」と位置づけた。

今回告示された、小・中学校の学習指導要領の目玉は「総合的な学習の時間」で、教科の枠を越えて横断的・総合的に実施される時間であり、子どもたちが自ら見つけた課題を解決していく学習が行われる。その時、解決に必要な情報を直接収集・整理する道具としてコンピュータや情報通信ネットワークが活用できる。

コンピュータ性能の向上、周辺機器、互換性のあるソフトの学校への普及率も高まり、インターネットに接続した学校も増えてきた。教育センターでは早くから情報教育に関する研究や支援を行っている。その結果、インターネットの授業への活用は、子どもたちの調べ学習やコミュニケーション能力、創造性を育成する機会を大きく広げることが分かった。

しかし、問題点も出てきている。莫大な情報の中から、本当に自分に必要で、役立つ情報を選び出されなければならない。教師自身がコンピュータを活用して問題点を把握し、情報社会のモラル、著作権等の指導をすることも教師の重要な役目である。

21世紀を目前にして本格的なマルチメディアの時代が到来しつつあり、学校での情報教育指導は、ますます必要性が増大していくこととなる。

将来いかなる職業に就くにせよワープロ、表計算、インターネットの最小限の知識が求められる。小学校段階から、21世紀を担う子どもたちに情報の本質を理解させる教育が必要であろう。

－小学校における「総合的な学習の時間」の授業づくり－

平成10年12月に告示された小学校学習指導要領を基に、平成14年度から実施される「総合的な学習の時間」の準備と授業展開について考えてみます。

平成14年度からの実施に向けての準備

1　「総合的な学習の時間」の理解

「総合的な学習の時間」のねらいは、学習指導要領の総則に記してあるように、「問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」ことです。

そのねらい追究のためには、児童に問題意識を持たせ、求めた活動を取り上げて学習を展開していくことが大切です。活動を始めれば壁にぶつかることもあるでしょう。しかし、自ら求めた活動であれば、その壁は「切実な問題」となり、それまでの教科、領域及び、学校・社会生活等で学んだ力を総合的に活用し、その解決を目指し、主体的な追究活動が行われ、ねらいに迫ることができるでしょう。

2　学校の教育課題の明確化

地域を見つめ、地域や家庭の願いを聞き、児童の興味・関心をつかんで、全職員で学校のやるべきこと（教育課題）を考えることが大切です。

3　教材開発

各学校が特色ある教育活動を展開するためには、各種の情報を収集し、独自の教材を開発する必要があります。例えば、児童・保護者・職員の意識調査や地域の人的・物的・歴史的情報の収集などです。これらの情報を把握することにより、有効な教材が明らかになってくるでしょう。

表　大和タイム・カリキュラム（仮題）

学びのレベル ↓ ＼課題 / 学年	課題①	課題②	課題③
3年	とうふを作ろう		
4年	川とくらし		
5年	私たちの郷土		
6年	郷土の未来を考えよう		

（注：必ずしも①②③全てに該当するものを計画するわけではありません）

4　カリキュラムの作成

学習活動は児童が決めることを原則としますが、小学校においては、児童に全てを任せておいたのでは、価値ある活動を期待するには難しい面があります。

そこで、学校の教育課題を基にした総合的な学習の時間のカリキュラムを作成する必要があります。右上表のように縦軸には「学年の発達段階における学びのレベル」、横軸には「学習指導要領の総則に示された３つの課題（①地域や学校の特色に応じた課題　②国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題　③児童の興味・関心に基づく課題）」と考えるのも一つの方法であると思います。

5　実践

「総合的な学習の時間」は、平成12年度から移行措置に入り、平成14年度から実施されます。教材開発などの準備を進め、年に１ないし２活動でも実施してみる必要があると思います。そして、児童の活動の様子や興味・関心の広がりなどに即して、教材や展開の在り方を修正していくことが大切です。

授業展開

大和タイム・カリキュラムに示した、第３学年『とうふを作ろう』を基に、授業展開（例）を考えてみます。

1　学習にはいる前の準備

この学年では、「ヘチマのさいばい」（理科）、「工場見学」・「商店街」（社会）について学習します。これらの学習から『とうふを作ろう』の教材が考えられます。そして、この教材から「とうふの作り方」「とうふ店の様子」など様々な活動の広がりが期待できます。『とうふを作ろう』では、まず、「町たんけん」を行い、実際にとうふ店を見学させ、とうふに対しての様々な思いを持たせるようにします。そこから、教材へと発展させていくのです。**（活動を決めるための体験）**

これとは別に、学校生活、社会生活の中で児童は「なぜだろう」、「やってみたい」、「調べてみたい」という思いを持つでしょう。教師は、その思いをメモしておき、適切な機会に全体のものになるように提示すれば、そこから学習活動を生み出すこともできます。**（個々の思いを全体のものに）**

ここで重要なことは、児童自身に問題意識を持たせることです。そのためには、教師による環境づくりや支援が必要となってきます。

2　効果的な支援のための教材研究

児童が求めた活動が、どのように広がっていくのか、また、どのような価値内容を含んでいるのかなどをあらゆる角度から分析**（教材研究）**することが大切です。そうすることにより効果的な支援が可能となってきます。

教材研究の技法例としてウェビングを紹介します。ウェビングとは、児童の活動や思いなどを関連付け、広がりとして表した手法です。『とうふを作ろう』では下の図のように表すことができます。必ずしも図に表した全ての活動を行うわけではありません。高学年になると児童と共に話し合って、活動の展開を予想することも可能でしょう。

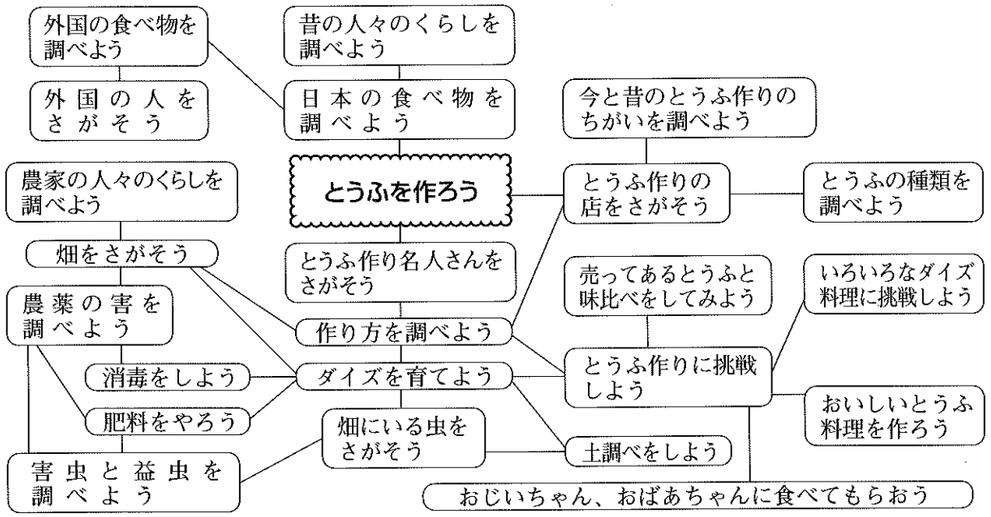


図　第３学年『とうふを作ろう』のウェビング

3　見取り

活動を更に深めたり広めたりするためには、児童の活動や作品を基にして、次の点についてきめ細かく見取っていくことが大切です。

(1) 活動への思いや疑問の深まり　(2) 活動に対する取り組み方（工夫）　(3) 新たな思い

4　評価

自ら問題意識を持ったか、主体的に追究したか、自分なりの方法でまとめることができたかなどを、それらの過程を大切にし、一人一人の児童のよさを考慮しながら評価します。

更に、児童のよさを相互に認め合ったり、教師が称賛したりして次の活動への意欲と自信を持たせるようにすることも大切です。

《指導と評価シリーズ》（小学校算数）

つくる　楽しむ図形の学習

自作コンパスを使った第３学年「円と球」の指導

所員　秋山　博

1　はじめに

平成10年12月に出された小学校学習指導要領の算数の目標の中に「活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活に活かそうとする態度を育てる。」と示されています。これからの算数教育は、教材を工夫し、子どもの主体的な活動を積極的に取り入れ、算数の不思議さ、面白さを感じ取らせていくことが大切になってきます。

ここでは、自作のコンパスを使って自由に円をかいたり、こまをつくったりする活動を通して、円の概念をとらえさせる指導実践を紹介します。

2　指導の実際

(1) 子どもの実態

円という形は普段の生活の中でよく目にする形です。円という用語は知らなくても「まんまるな形」として認識しているようです。第３学年「円と球」では円の定義としての「一定点からの等距離にある点の集合である」ことを子どもなりに気付かせることが重要です。

(2) 教材の工夫

幾つかの教科書には、コンパスの前段階として図１のような教材で円をかかせるようにしてあります。

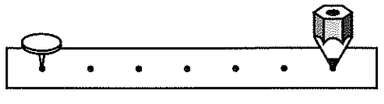


図1　教科書に提示されたコンパス

鉛筆と画鋲で任意の２点を取り、画鋲の点を中心に鉛筆で円をかいていきます。

前述の円の定義や「円の大きさは半径の長さで決まる」ことをさらに子ども自身に分かりやすくとらえさせるために、自作の教材で取り組んでみました。

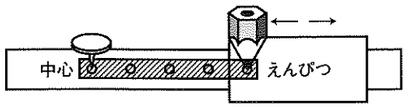


図2　自作コンパス

図２の中心を画鋲で固定し、右側の鉛筆の点に鉛筆を差し込み、回転させながら円をかいていきます。えんぴつの部分を左右にスライドさせることによっていろいろな大きさの円をかくことができます。

この自作のコンパスを使うことで、円をかくとき中心から円周までの距離（半径）は一定で、いろいろな大きさの円をかくには、半径の長さを変えればよいことに気付かせたいと考えました。

(3)「円と球」での算数の楽しさ

・　教材そのものの面白さ

子どもにとってこまを作って回すことは、それ自体楽しいことです。さらに競争となると熱中する度合いは高まると思います。

コンパスを使ってきれいな模様のこま、よく回るこまを作る活動を通して、円の概念を学び取らせていきます。

・　他の活動との関連づけ

子どもの意識の中に「自分と友達のどちらのこまが、長い時間回るか競争したい。」という欲求は高いと考えられます。「こま回し大会をしよう」とテーマを投げかけます。円の学習と学級の活動と関連づけることで、主体性のある活動が期待できます。

・　活動の楽しさ

コンパスを使って自由に円をかいたり模様をかいたり、長さを写しとったりする活動を重視し、操作活動そのものの楽しさを味わわせます。

(4) 授業の実際

①本時の授業（1／8　円の概念の理解）

②本時の目標

・　円をかく活動を通して円に関心を持ち、円の概念や「中心」、「半径」の意味を理解する。

③本時の展開

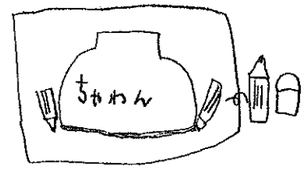
過程	学　習　活　動	教　師　の　指　導　と　支　援
つかむ	1　こまを回してよくまわるこまについて考える。	○　いろいろな形（円、楕円、三角形など）のこまを回してみて、よく回るこまは、円形になっていることをつかませる。 ○　「円」という用語を知らせる。 ○　「こまを作って友達と競争しよう。」と提案し、円をかく必要感を持たせる。
予想する	2　課題を知る。　円をかく方法を考えよう。	
考える	3　円をかく方法を考える。	○　方法が思いつかない子どものために、ヒントになる道具を準備しておき、その道具から方法を類推させるようにする。
	4　方法を発表し、話し合う。	○　こまを作るためには、単純にコップなどで円をかくより中心も分かるし、大きさも自由にかけるコンパスのような道具でかく方が、より有効な方法であることに気付かせるようにする。
	5　自作のコンパスで円をかく。	○　自由に円をかく活動を通して、円は中心から同じ長さの線を一回転してでき、円の大きさはその長さで決まることに気付かせる。
まとめる	6　円についてまとめる。	○　円の概念について、子どもの言葉をもとに、まとめさせる。

(5) 子どもが考えた方法（ワークシートを集計）

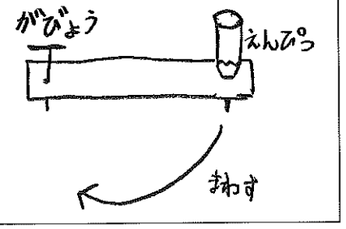
図３

ａコップ、お茶碗など	31人
ｂ画用紙と画鋲	6人
ｃひもと画鋲	4人

aの方法



bの方法



これらの方法を子どもに発表させながら、どの方法がいいか話し合わせました。よく回るこまは、やはり中心があった方がよいことにはすぐ気づくことができました。教師の説明を聞くことで、ｂやｃの方法は円の大きさも自由にかけることが納得できたようです。

(6) 自作のコンパスで円をかく

図２のコンパスを使って、どの子どもも自由に円をかくことができました。えんぴつの部分をスライドさせて同心円のいろいろな大きさの円をかいていました。

半径の長さが変わらないから円がかけること、円の大きさについても半径の長さを長くすれば大きな円が、短くすれば小さい円がかけることが活動を通してとらえることができ、次時のコンパスを用いたこまづくりの活動につなげることができました。

3　おわりに

これからの算数は、他の教科だけでなく、教育活動全般、家庭生活、社会生活を見据えて、関連づけながら、豊かな体験を通して算数の不思議さ、面白さ、美しさ等を味わわせていくことが重要です。

日常の中から問題を取り上げ、具体的な操作や実験・実測、ゲームやクイズのための教材を教師なりに工夫していく姿勢が必要ではないでしょうか。教師の試行錯誤の中からいい教材が生まれてくると思います。

《指導と評価シリーズ》（中学校道徳）

子どもが意欲的に取り組む道徳授業

── 発問の工夫に焦点をあてて ──

所員　中尾　聡彦

1　はじめに

心の空洞化がいじめなど様々な問題を生みだしています。このような心の問題を解決していく上で道徳教育は不可欠です。特に、学校における道徳教育を進めていく上で、子どもたちにとって楽しく学びがいがあり、教師にとっても成就感のもてる道徳授業を創り出すことが急務になっています。

そこで、平成10年10月に教育センターで実施した「心の教育に関する調査」をもとに、子ども、教師共に魅力ある道徳授業の在り方を、今年度実施した研究授業を例に紹介します。

2　道徳の時間に関する意識調査

県内の小学校、中学校、各20校で小学３年生、６年生、中学２年生を対象に行った調査結果の一部を紹介します。

「あなたは、道徳の時間は好きですか？」という問いに対して、「好き」と答えた子どもたち（「どちらかというと好き」も含む）と「嫌い」と答えた子どもたち（「どちらかというと嫌い」も含む）に分けて「資料とのかかわり」「登場人物とのかかわり」の２点から探ってみました。

道徳の時間が「好き」と答えた子どもたちの４割程度は、毎回どんな資料なのかを楽しみにしていました。また、自分を登場人物に重ねながら考える子どもたちは６割程度います。

逆に「嫌い」と答えた子どもたちの４割弱は、資料がつまらないと感じていました。また、自分を登場人物に重ねながら考えている子どもたちは２割強しかいませんでした。

表1「好き」と答えた子どもたちの回答（%）

対象学年	どんな資料か楽しみ	自分が登場人物だったら
小学3・6年	40.5%	58.0%
中学２年	38.0%	67.0%

表2「嫌い」と答えた子どもたちの回答（%）

対象学年	資料がつまらない	自分が登場人物だったら
小学3・6年	37.5%	23.5%
中学２年	37.5%	25.0%

特に道徳の時間が「嫌い」と答えた子どもたちについて、他の調査項目とのかかわりから分かってきたことは、資料の内容や登場人物のような生き方は大切だと分かっているが、今の自分には受け入れることができないということでした。

3　授業改善のポイント

「道徳の時間に関する意識調査」の結果から、子どもたちが自分と登場人物を重ねながら考え、楽しく学びがいのある授業づくりのために、次のような視点から発問を見直しました。

○　人間の自然性について考える発問、価値について考える発問とを区別し、はっきりさせる。
○　資料について考えるのか、自分自身について考えるのか、人間に共通するものを考えるのかをはっきりさせる。
○　資料と子どもとの通路がつきやすい発問を工夫し、子どもが自分と重ね合わせて考えやすいように工夫する。

4　指導の実際

(1) 道徳学習指導案

①　主題名「人としてよりよく生きる」3－(3)
②　資料名「公園でひっそり生きる人」
　　出　典 日本標準　一部改作
③　ねらい
　　人間のもつ弱さや醜さにふれ、須藤さんの生き方を通して人としてよりよく生きることへの憧れを感じとらせる。

過程	学習活動・主な発問	指導上の留意点
気づく／つかむ／みつめる／あたためる	1　「イライラ」「むかつき」について考える。 ○　あなたは、何にイライラしたり、むかついたりしていますか。	○　アンケート結果をもとに「イライラ」「むかつき」の要因を明らかにすると共に、少年たちの心情理解の布石とする。
	2　資料を読み話し合う。 ○少年たちの心情や行為について考える。 ○　少年たちは、須藤さんをなぜ殺してしまったのでしょう。 ・　同じような理由でイライラしたりむかついたりすることがありませんか。	○　導入との関連を図り、少年たちの凶行の一因である「イライラ」や「むかつき」と同じような心情が自分たちにもあることに気づかせる。
	○　殺された須藤さんの人生や人柄について考える。 ○　殺された須藤さんの人生をどう思いますか。 ・　苦しい生活の中で、一生懸命働いたのはなぜでしょう。 ・　「それから私の人生は大きく変わりました」とはどういうことでしょうか。	○　厳しい時代を生きてきた須藤さんの苦労や、苦労を共にした奥さんを亡くした悲しみは想像でしか考えることができないであろうが、人としてよりよく生きるという視点から須藤さんの生き方について考えさせたい。
	○　須藤さんはどんな心のもち主だったと思いますか。 ・　逆境の中で人としてよりよく生きたのはどうしてでしょう。 ・　君たちにも須藤さんと似た心がありませんか。	○　逆境の中でも「努力する心」「人を気づかう心」「人に迷惑をかけまいとする心」を忘れなかった須藤さんの人柄にひたらせたい。 ○　これまでの経験を想起させ、須藤さんの人柄に似た側面が自分にもあることに気づかせ、生きる喜びや勇気を感じ取らせたい。
	3　自分の生き方について考える。 ○　どのような気持ちを大切にして、これからの人生を歩んでいきたいですか。	○　須藤さんの生き方から学ぶことを視点にし、書く活動を取り入れ、これからの自分自身の生き方をみつめさせたい。
	4　新聞の投書を聞く。	○　同じ年代の高校生の投書を紹介し、意識の継続化を図る。

(2) 子どもの反応（ワークシートより）

○　今、自分には須藤さんのような、夢、目標が欠けている。それをもって生きている彼を知った以上、目標をもち、それに向かって一生懸命生きたい。
○　私にも、須藤さんのように周りの人に迷惑をかけたくないという気持ちがありました。
○　人生が自由っぽい私には、普段こういう気持ちになれることはないでしょう。この道徳で、今までとは違った気持ちになれました。

5　おわりに

今回紹介した事例は発問の工夫に焦点をあてたものですが、生徒たちは登場人物のように自分はできない、なれないという距離をおいた考え方ではなく、人としてよりよく生きるという視点で、自分と登場人物を重ねながら前向きに考えていたようです。

教師が子どもの意識の流れを大切にして子どもの心に深く受け止められる授業を目指すとき、子どもにどのような視点からどのようなことを考えさせたいのかという目的を明確にもって発問を構成する必要があると思います。

発問を工夫し、子どもたちに自分と登場人物とを重ね合わせ、自分にとって切実な問題として考えさせることができれば、子どもの授業に対する興味や関心が高まり、週１単位時間の道徳の時間が主体的な学びの場へと変わっていくのではないかと思います。

受講者の声

「軽度障害児の教育」を受講して

佐賀県立中原養護学校　内川　美恵子

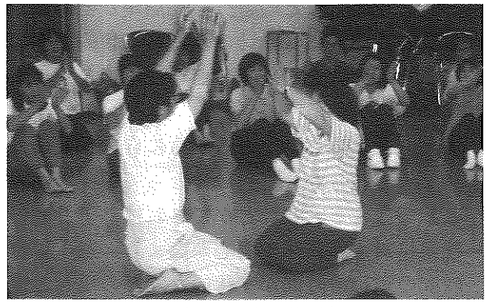
重度重複の障害を持つ子どもたちと関わる時に、情緒に直接働きかける音楽は言葉以上に有効なコミュニケーションの手段となることが多いようです。私たちの学校でも、日頃から音楽を通した活動を多く取り入れていますが、今回、リズム運動療法の竹内光春先生のお話が聞けるということで嬉しく、心待ちにしていました。

「障害のある子どものリズム運動療法の理論と実際」と題して話された竹内先生は、年齢を感じさせない若々しさ。先生と一緒に数々のオリジナル教材を体を動かしながら歌っているうちに、童心に返り心を開いて活動することができました。先生の言われる、リズム運動による「からだことば」の交流と他者を意識しコミュニケーションを育む学習を体験できた楽しい時間でした。

特殊学級で、生活単元学習や作業学習を中心に意欲的に実践を重ねられた事例では、授業や進路指導を通じて信頼関係を築くことで学級が心の安定場所となることの重要さを感じました。

しいのみ学園の全職員で作り続けられた数々の教材・教具を提示しながらのお話では、意欲を誘発しながら感覚を刺激するもの＝遊びを通して教えるものであることを学び、実際に廃物を利用しての製作活動も試みました。

講師の先生方のお話を聴き演習を行う中で、子どもたちの顔を思い浮かべながら、今後の援助の在り方について思いを巡らせることができた有意義な３日間でした。ありがとうございました。



写真「リズム遊び」

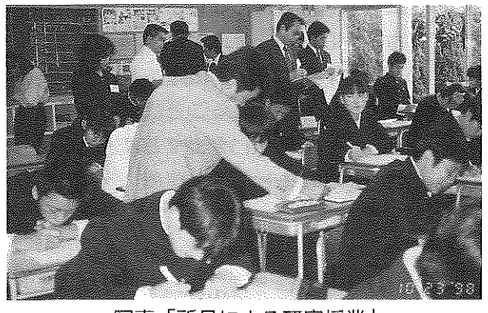
中学校「数学科」講座を受講して

鳥栖市立田代中学校　青木　国博

「数学嫌いの生徒もおもしろいと思うような授業を展開する」これが新採の頃からの私の目標でした。しかし、正直なところ今まで課題学習についてはあまり取り組んだことはありませんでした。単に余裕がない、それだけの理由です。今回、この講座を受講し、課題学習の大切さを再認識することができました。特に、講座２日目の担当所員による研究授業は、衝撃的でさえありました。

この講座の研究授業は、これまで私が参観してきた（とは言っても僅か５年あまりですが）数学の研究授業とは一線を画していました。課題学習という内容であったというだけでなく、生徒たちの授業に参加する態度が格段に積極的であったからです。彼らの目が好奇心で輝いていたのです。私は今まで、教科書に書かれた内容をいかに解りやすく生徒に伝えるか、という授業をしてきました。それに対し、この研究授業では、まず生徒がいて、彼らが学ぼうとするために課題が設定されていたのです。だからこそ、生徒たちが積極的に授業に参加していたのだと思います。

「数学嫌いな生徒も面白いと思うような授業」口で言う程簡単なものではありません。しかし、今回のこの講座を受講してその糸口のようなものが見えたように思いました。実践発表をしてくださった先生方のお話や資料を参考にして、自分が掲げた目標に向け、生徒を中心とした授業を展開できるよう努力しようと思います。先生方どうもありがとうございました。



写真「所員による研究授業」

研修の成果を子どもたちに

初任者研修（初任者の感想）

初任者研修の「校外研修」は30日間。そのうち小・中・高等学校の初任者を対象に、17日間、特殊教育諸学校の初任者を対象に18日間の研修を教育センターが実施しています。

研修に際しては、初任者の実践的指導力や使命感を養うために「講演・講話」の内容の充実を図っています。また、幅広い経験を通して教師としての資質を高めるため、養護学校、企業・福祉施設、農業大学校での研修や、北山少年自然の家での2泊3日のテント泊等の「体験的研修」の充実に力を入れています。今回は、初任者の感想の中から、研修の様子を紹介します。

社会福祉法人「桂寿苑」での研修

「理解する」ということ

武雄市立武雄小学校　溝口　京子

「この仕事は、老人の方々を理解しないとできませんよ」苑長さんの言葉を実感した１日でした。苑内を歩いていると、一人のおばあさんに「起こして」と声をかけられました。おばあさんは車椅子に座っており、体は起きている様子。言葉は通じているのに、おばあさんがしてもらいたいことが分からない、してあげられない。何とも言えない気持ちを味わいました。すると、苑の職員の方が手助けをして、背骨が曲がらないように“起こして”くださいました。これを見て、“理解する”ということは、言葉を聞くだけでなく、言葉の陰に隠れている心を読みとることなんだと痛感しました。その理解があってこその信頼関係を苑のあちらこちらで見せていただきました。

研修を終えてのミーティングで、苑長先生が「相手がお年寄りであろうと、子どもであろうと同じ人間なのだからここで学んだことは確実に生かせると思います」と言う言葉を聞き、私も子どもたちとこういう信頼関係をぜひ築いていきたいと思いました。そのためにも、子どもたちの話を聞き、その言葉だけでなく、その陰に隠れている心を感じとれるように、本当の意味で子どもを理解できるように努力していきたいと思いました。

「佐賀県農業大学校」での研修

「育てる」ということ

多久市立多久中央中学校　田渕　真弓

私の父の職業は農業である。中学生の頃から父が農業だと人前で言うのが恥ずかしかった。何となくスーツ姿の友達のお父さんを見るとうらやましく思っていた。そして、そう思っていることが父に対して申し訳なく、うしろめたかった。

今日は農業大学校に研修に行くと言うと、父はうれしそうだった。私も今、うれしくてしかたがない。父に対して、農業に対しての考えが変わったからだ。教育は人を育てる仕事だと言うが、農業も生命ある物を育て、よりよい物を造りだそうと言う点では、全く同じ価値を持つものだろう。

肉体的な疲れはあるが、逆に心と精神はだんだん元気になっていく感じがした。こちら側の手抜きや油断は、すぐに結果となって表れてくる。生物は素直。そして、強い。今の、このすっきりとした心を大切に生徒と接していきたい。

生徒も生物と同じで、少しの変化も見逃すわけにはいかない。愛情を持って接することはもちろん、生徒達にも生物を通して何かを学べる機会をつくりたい。

（研修の中で初めて作った）縄のように、見た目は悪くても、しっかりと絡み合い、丈夫な、そんなクラスを作っていきたい。

校内研究 ～我が校の取組～

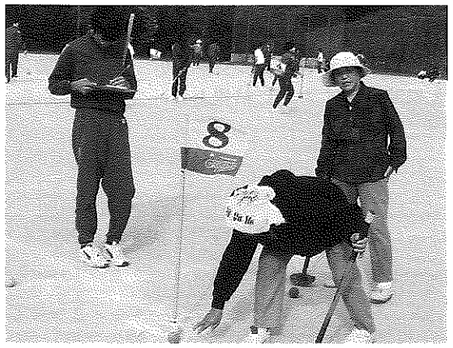
ひとりひとりを生かし、豊かな心を育てる教育をめざして ～体験活動と表現活動を通して～

唐津市立第四中学校 校長　浦田　邦彦

本校は、小中併設校である。13年前よりボランティア協力校として環境整備を中心に「豊かな心」を育む教育の実践を積み重ねてきた。平成9・10年度唐津市教育委員会の委嘱を受け小中連携のもと、その研究成果の発表を終えたばかりである。

研究の柱は、体験活動や表現活動を通して「豊かな心」を育むことである。体験活動の中のボランティア活動を、①老人との交流、②環境整備、③啓発の３部に分け、小中連携のもと実践する中で、協力性、自発性、思いやり、感謝の心が生まれてきた。また、多くの生徒が体験や感動したことを発表するスピーチ集会は、表現力を高める一助になっている。月一回のスピーチ集会では5～6人が発表し、自分の考えや気持ちを伝え、友達の発表を聞くことにより、自分自身を見つめ直し、これで良いのか等を考え、実践力を身につける場ともなっている。

今後も、小中の連携、地域の連携を密に多くの体験の場を設定していくつもりである。



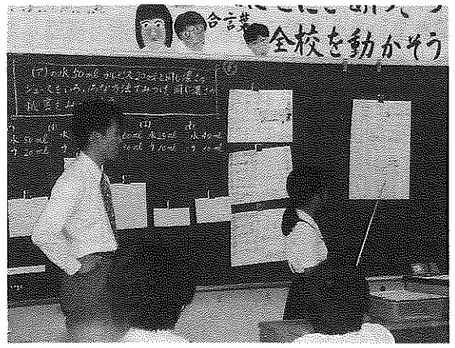
お年寄との交流（グランドゴルフ大会）

自ら学び取る力を育てる算数科授業の創造 ～「深まりを」をめざして～

浜玉町立平原小学校 校長　横尾　光一郎

本校は、平成５年度に県教育委員会並びに浜玉町教育委員会の委嘱による学力向上推進モデル校としての発表を行って以来、一貫して算数の研究を進めている。「算数のよさ」を中心とした教材分析や「よさ」を味わわせるための学習過程（やまびこ学習過程）を柱として研究してきた。昨年度からさらに、素材研究から指導法の研究、学習の内容的必然性、アイディアの具体化、合目的的な操作活動、子供の認識のレベル（行動→映像→言語）等を授業づくりの課題としてとらえ、授業実践を行ってきた。今年度はその「深まり」をねらっている。「深まり」とは、児童の学習への深まりと共に、教師の教材分析からくる授業づくりの深まりを考えている。

校内授業研究会は、毎回広く県下に公開している。多くの先生方に参加していただき感謝している。授業に対する批正を仰ぐと共に学び合いの場としても活用されていると考えている。今度はさらに、主体的に学習していく児童の育成を目指し、研究を進めていく。



第6学年「比とその利用」

《佐賀再発見シリーズ》

謎の多い肥前鳥居

所員　小川　徳晃

神社の鳥居は、神の世界に入る門に当たります。鳥居にもいろいろな形がありますが、県内では全国各地に見られる明神鳥居や直線的な神明鳥居を基本にした肥前鳥居が知られています。

日本は伝統的に木の文化でありますが、肥前鳥居はどっしりとした石の重量感と、精巧な石のつなぎ合わせのバランスの美をもち、日本では異風鳥居と称されるものです。しかし、「この肥前独特の鳥居をどういう理由で、だれが作り出したのか」「どうして、佐賀県を中心とする肥前一帯に分布しているのか」「なぜ、三本つなぎになっているのか」など多くの謎が指摘されていますが、風雪にさらされ長い年月のために風化しているものもありますが、昔の人たちの肥前鳥居にかけた願いや思いを、少しでも懐古できたらと思います。

肥前鳥居について

肥前鳥居とは、室町末期から江戸末期にかけて佐賀を中心とする肥前一帯や長崎県、福岡県の一部に分布し、独特の形をもつ鳥居です。普段私たちが見かけるすっきりとした明神鳥居と比べ、どっしりとした落ち着きのある鳥居です。

調査の結果、佐賀県内では、108基、長崎県、福岡県を合わせると約150基の肥前鳥居があります。

「玉せせり」で有名な福岡市東区箱崎にある筥崎宮一の鳥居（慶長14(1609)年）などは、県外の肥前鳥居として重要なものです。

肥前鳥居の特色は

左下図の名称をもとに考えると次のような特色があります。

(1) 笠木と島木とが分かれずに、一体化していて、木鼻の部分が流線形（バナナのさき）の様になっています。
(2) 笠木・島木・貫・柱の各部分が原則的には三本つなぎになっています。（鳥居の高さが低いものは、柱が二本つなぎになっているものもあります）
(3) 柱の下の方に明神鳥居のように亀腹（きんく）を設けないで、柱の下の方を削りだし、その部分を土の中に生け込みにしています。
(4) 柱の上の方には、形式的に台輪を削りだし、明神鳥居のように楔（くさび）をつけていません。

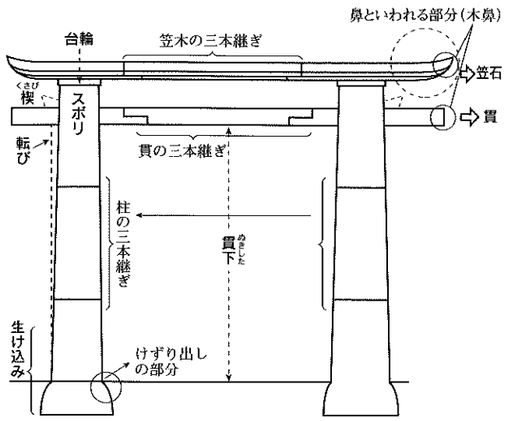


図　肥前鳥居の各部の名称

県内でも最も古い稲佐神社の肥前鳥居
天正13(1585)年　　杵島郡有明町辺田

お知らせ

本教育センターでは、次のような支援活動（試行）を始めています。
詳細については、佐賀県教育センターへお問い合わせ下さい。

「インターネット相談所」

① 教職員のインターネットに関する質問に対応します。
② その他、コンピュータの操作に関する支援を行います。

実 施 日：毎月第2土曜日(9:00～12:00)
場　　所：教育センター　パソコン棟
対　　象：佐賀県内の教職員
申込方法：電話またはFAX

「図書資料室の活用推進」

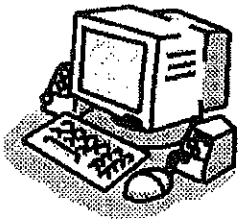
教育センター図書資料室の閲覧時間を延長します。

実 施 日：毎週火曜日(17:15～19:00)
（ただし、長期休業中及び祝日は除く）
場　　所：教育センター　1階　図書資料室
対　　象：佐賀県内の教職員
申込方法：事前の申込は不要です。お探しの資料等がある方は、事前にお知らせいただければ準備しておきます。

「不登校を考える会」

自由な雰囲気の中で、心の悩みをお互いに話し合う場を提供します。

実 施 日：毎月第3日曜日(10:00～12:00)
場　　所：教育センター
学校適応指導教室「しいの木」
対　　象：不登校の児童生徒を持つ保護者
申込方法：電話で直接



『教育情報だより』

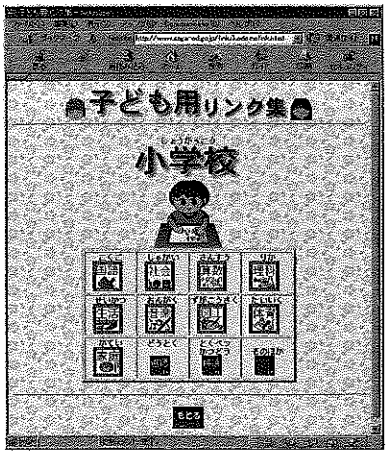
「教育情報だより」第8号を、佐賀県教育センターのホームページ上の教育センターニュースに掲載しました。ご覧ください。
(http：//www.saga-ed.go.jp/center_news/kyouikujuohou/index.html)

掲載内容

- “EDU－QUAKEさが”の利用手続き
- インターネットの利用状況
- パソコン通信ハイパーリンクの紹介
- 新規開設ワークショップ、学校ホームページのお知らせ
- 教科用リンク集公開
- インターネットを使った授業を参観して

『教科用リンク集』

子ども達が授業（教科、領域等）で活用できるリンクを集めてみました。
(http://www.saga-ed.go.jp/link/kodomolink.html)



編集・発行　佐賀県教育センター
〒840－0214 佐賀県佐賀郡大和町大字川上字西山
TEL 0952－62－5211　FAX 0952－62－6404
ホームページ http://www.saga-ed.go.jp/
《12-76》